

食育に関する基礎調査 — 子どもの頃の状況・経験の影響 —

An Investigation of Dietary Education — The Effect of Childhood Conditions and Experience —

塩 原 紘 栄

SHIOHARA Tsunae

I. はじめに

食物は生物としての人、文化を共有する人にとって大切な事は自明のことである。しかし、日々の営みの中でその大切さが蔑ろにされ地球環境の汚染・生命現象の変化が起きてきている。このような情勢を踏まえて食の重要性が再認識され食育基本法も成立した。

食育は幼稚園・保育園をはじめ小学校など教育現場では勿論、食料の生産者・消費者の団体、その動きをバックアップする行政と様々な立場で実践されている。

或る出来事・行為の経験体験が食に対して望ましく正しい行動意識になるとすれば子どもに対する食育の内容として相応しい物となる。そこで、食に関する日常の生活経験・体験が後に食に関する考え方・行動に影響を及ぼすかを探って見ようと試み、質問紙法による調査を行った。その結果若干の知見が得られたので此処に報告する。

II. 研究方法

研究は三様の属性を持つ対象者に対するアンケート調査により行なった。

1. 対象者の属性および有効回答票

対象者の属性および有効回答票は次の通りである。

- | | |
|---------------------------------|------|
| a. 幼稚園園児の保護者（富山市内の1園、配布回収は園に依頼） | 92票 |
| b. 保育園関係者（富山県保育士研究大会食育分科会参加者） | 45票 |
| c. 幼児教育学科学生 | 170票 |

2. 調査時期と内容

調査時期は平成17年2月である。

アンケートは三群の対象者共通質問「子どもの頃の状況・経験」と対象者別質問「現在の状況」からなる。前者では6項目の質問に対してそれぞれ4つの回答選択肢を提示し自分の立場に該当する回答選択肢内容に○を付して回答する方法である。後者では対象者別に4から6項目の質問数である。

III. 結果および考察

1. 共通質問、状況・経験の部

この部の共通質問項目は次の6問である。各問、同意見の回答に○をつけ、○の数は自由で

ある。

Q 1 周囲の状況

Q 2 台所の情景

Q 3 朝食

Q 4 夕食

Q 5 親子共有

Q 6 行事郷土食

表 1 に左から順に問いの項目、回答選択肢の内容 a b c d、回答率を示す。全体回答率は対象者数の多い学生の結果が影響しやすい。

Q 1 周囲の状況では、b.豊かな自然環境、a.関係者が農業、c.栽培収穫体験が60から76%で高く、多くの人が自然と深く係わりのある生活をしている。

Q 2 台所の情景では a.活気がある、が80%を越え、c.寛いで過ごす、b.好きな居場所も50%と、台所・キッチン・ダイニングなどの部屋が肯定的に捉えているが、d.あまり行かないも少数ではあるが見られる。

Q 1 では対象者毎の差異は大きくなかったが、Q 2 では b、c で差異が見られる。

Q 3 朝食は朝食を家族が共にする大切さの視点で提示したので a.一緒に食べるを重視したいと思ったが約60%と低い。b.美味しいは食事の基本でありこれも多くの賛同を得たいと思ったが約45%と低い。しかし両者とも対象群による差が大きい。c.パンよりご飯はご飯の優位性は7割に達する。d.休みの日は学生が多い。

Q 4 夕食ではやはり a.父と一緒に、b.楽しくの

表 1 共通質問（子供の頃の状況・経験）

(%)

問の項目	回 答 内 容	回答率			
		対象者 全体 n=307	保護者 n=92	保育 関係者 n=45	学生 n=170
Q 1 周囲の状況	a. 周囲または近い 関係者が農業 に携わった	60.6	55.4	53.3	65.3
	b. 周囲に田や畑、実のなる木などがあり、 豊かな自然環境 だった	76.5	72.8	75.6	78.8
	c. 野菜などの 栽培収穫 、魚取り、キャンプなどの 体験 がある	68.1	58.7	55.6	76.5
	d. 徒歩の行動範囲に八百屋、魚屋など 自営業店 があった	46.9	54.3	66.7	37.6
	全体回答率	252.1	241.3	251.4	258.2
Q 2 台所の情景	a. 家族誰もが何となく出入りしていて 活気がある	81.4	78.3	82.2	82.9
	b. 自分の 好きな居場所 の一つ、色々の事ができる	48.9	35.9	40.0	58.2
	c. テレビを見たりして 寛いで過ごす	61.9	58.7	44.4	68.2
	d. 食事をする時以外 あまり行かない 、行きたくない	5.9	7.6	6.7	4.7
	全体回答率	197.7	180.4	173.3	214.1
Q 3 朝食	a. 家族 一緒に食べる 事が普通	59.3	58.7	77.8	54.7
	b. 食欲があり 美味しい と思って食べる	45.3	40.2	35.6	50.6
	c. 主食はパンより ご飯 の方が多い	67.1	68.5	73.3	64.7
	d. 休みの日は普段と献立や時間、雰囲気異なる	47.9	34.8	26.7	60.6
	全体回答率	219.6	202.2	213.4	230.6
Q 4 夕食	a. 父と一緒に の事が多い	48.9	44.6	71.1	45.3
	b. 夕食は 楽しく 、好きな料理が並ぶ	49.5	39.1	31.1	60.0
	c. 時間を待ちきれず におやつを食べる事が時々ある	57.3	48.9	24.4	70.6
	d. 箸の持ち方 、行儀の良い食べ方を教えてもらう	63.8	66.3	64.4	62.4
	全体回答率	219.5	199.0	191.0	238.26
Q 5 親子共有	a. 食料品の 買い物 、欲しい物が買ってもらえる	56.0	44.6	35.6	67.6
	b. 買ってきた 食料品 が料理されて食卓に出るの楽しみに待つ	47.6	37.0	31.3	57.6
	c. 料理が出来上がるのを見ていて、時々 お手伝い をする	69.7	59.8	73.3	74.1
	d. 野菜や果物、魚について 名前など 教えてもらう	51.5	47.8	62.2	50.6
	全体回答率	224.8	189.1	202.4	250.0
Q 6 行事・郷土食	a. お祝い事 （新入学など）には赤飯を食べる。	77.5	77.2	86.7	75.3
	b. 桜餅、草もち、おはぎ、柏餅など季節・ 行事に因んだ物 を食べる	77.2	78.3	71.1	78.2
	c. 季節の物 、旬の物がよく食卓にのる	76.2	76.1	80.0	75.3
	d. 煮物、和え物、よごしなど 和風の料理 を食べる	82.7	90.2	84.4	78.2
	全体回答率	313.6	321.7	322.2	307.1

結果を重視したが両者とも50%未満である。Q 3 bよりQ 4 bの方が5 %程高く夕食の方が存在感を示す。Q 4 の中では d 箸の持ち方が高い。保育

関係者はQ3aとQ4a共に多い反面、Q3bとQ4bが少ない特徴を示す。

Q5 親子共有は親と子が一緒に係わる事柄を提示した。4 回答全部に○が望ましいが、48～70%までの範囲、平均回答率は56%である。しかし、c お手伝いの選択割合が最も大きく、対象者による差も小さい。d 名前など、b 楽しみに待つと a 買物は対象による差が大きく、保育関係者ではa、bとも最低、dでは最大となりQ3・4に続いて特徴ある結果である。

Q6 行事食は具体的な料理についてである。この項目も、食文化の伝承や食物を大切にする様子がうかがえ全部○が望ましい。

Q6 は6 項目の質問の中で最も高い率となり、対象者による差も小さい。子どもの頃を振り返ると誰もが行事の食べ物、和風の食べ物を懐かしく思い出せる為ではないかと思う。

2. 対象者別質問、現在の部

項目を「現在についておたずねします」、「保育関係者として望むことは」などと改めて4 または6 項目質問を行い、番号もその都度Q1

からとしたが本報ではQ7 として述べていく。

(1) 保護者の現状

項目を「現在についておたずねします」と改めて次の4つの質問をした。

Q7 悩み、

Q8 自分の事・立場

Q9 実行している事、

Q10大切にすること、

表2にそれぞれの回答内容、回答率を示す。Q7.悩みの中で偏食に関するa.日常の食品のみが60%と高いが、b.におい・口ざわり、c.骨のある魚、およびd.食事に時間（小食）、は高くなく、e.太り気味の心配も低い。f.アレルギー体質は3.3%である。この数字がどのような現状を示すか判断できないが、100人規模の園で3.3人いるとすれば園での食事指導・食事提供にも影響があると思われる。

Q8は所謂日常の反省事項である。回答率の低さが目立つがa.職業に就いているは園児の保護者としては常識的な数値かと思う。しかし、c.食品知識、b.手作りを心がけて40%前後の保護者が反省点としている。

表2 対象者別質問、保護者用「親としての現状」

(%)

問い	回 答 内 容	回答率	問い	回 答 内 容	回答率
Q7 困っている事	a. 日常の食品の中で食べようとしない食品がある	59.8	Q9 実行している事	a. 購入時に材料 賞味期限 産地などの品質表示を確認する	78.3
	b. におい・口ざわり がだめで食べない食品がある	38.0		b. 冷凍・レトルト、お惣菜など 上手 に利用し 食卓に変化 をつける	37.0
	c. 骨のある魚 、果物の種・皮などが上手に扱えない	25.0		c. 栄養 のバランスのとれた 献立 を考える	60.9
	d. 食事に時間がかかり 小食 である	21.7		d. 行楽 の時には 手作り弁当 を持参する	41.3
	e. 食欲が旺盛 で太り気味である	6.5		e. 冬至のかぼちゃ、土用のうなぎなど 伝統料理 を取り入れる	63.0
	f. アレルギー体質 なので心くばりが大変	3.3		全体回答率	223.8
	全体回答率	154.3	Q10 大切にすること	a. 栽培 などの 体験 を通して食物には命がある事を伝える	39.1
Q8 自分の事	a. 職業に就いている ので時間のゆとりがない	21.7		b. 食事が出来るまでは 多くの人の手 が関わっているので大切にすること	48.9
	b. 手作り を心がけていると思うように ならない	39.1		c. 健康な 心身のため には栄養のある食物を食べる	71.7
	c. 食品についての知識が乏しく、 調理技術が未熟	44.6		d. 毎日の食事は 子どもと一緒に 楽しく食べる	85.9
	d. 栄養 についての基礎的 知識 、働きをもっと知りたい	32.6		全体回答率	245.6
	全体回答率	138.0			

表3 対象者別質問、保育関係者用「保育関係者として望む事」

(%)

問い	回 答 内 容	回答率	問い	回 答 内 容	回答率
Q 7 食卓環境	a. 食事の時には 保護者が必ず側 に居る	62.2	Q 9 栄養面	a. 成長発育のために 栄養的に整った食事をする	73.3
	b. TVなど見ない で家族がコミュニケーションしながら食べる	53.3		b. ご飯とおかず （汁、料理の皿数）のバランスで栄養を考える	73.3
	c. 箸の持ち方・姿勢 などマナーを教える	33.3		c. 自分で作れる料理の品数 をふやす	24.4
	d. 食事の始めと終わりには 挨拶、感謝の言葉 を言う	57.8		d. 栄養や 食品の情報 に気を配る	26.7
	全体回答率	206.6		全体回答率	197.7
Q 8 親子共有	a. 買い物や食事の場 で名前や味などを説明	28.9	Q 10 嗜好面	a. 出された食物は 残さない ように気をくばる	42.2
	b. 調理している側 で食物が出来上がって行く様子を見せる	46.7		b. 少しの偏食 は楽観視する	28.9
	c. 子どもが 手伝いたい 時には出来る範囲で手伝ってもらう	84.4		c. 生活リズム を大切に、食欲のある時に食事にする	46.7
	d. 栽培・収穫 などの体験を共にする	46.7		d. 美味しく食べる ように、会話や雰囲気工夫する	77.8
	全体回答率	206.7		全体回答率	195.6

Q9は実行していることについてである。a.品質表示は80%近くと高いが、○の数に制限がないので100%に近い回答率であってほしいと思う。b.冷凍・レトルト、c.栄養のバランス、d.手作り弁当、の3つは約40%から60%である。これらは100%という事は出来ないなのでその時々状況に応じて実行してほしい事である。e.伝承料理は経験・体験の部でも質問した（Q6）。

Q10は大切にしている事の質問である。d.子どもと一緒に、c.栄養のある食物が高い。

a.栽培体験は、経験・体験の部でも質問し（Q1-c）、d.食事は子どもと、もQ3-a、Q4-a.に関係し、86%と最も高い。共食の大切さは幼児期の保護者は強く認識している結果と思う。

（2）保育関係者として望むこと

項目を「家庭の中で幼児期の食生活について大切と思う事」と改めて次の4つの質問をし、回答は2つ以内とした。

Q7 食卓環境 Q8 親子共有作業

Q9 栄養面 Q10嗜好面

表3にそれぞれの回答内容、回答率を示す。

Q7 食卓環境ではc.箸の持ち方が、他のa.保護者が側、b.TVを見ない、d.挨拶・感謝の言葉

に比べて低い事が目立つ。

Q8 親子共有作業ではc.手伝いたい時が最も高く、全4問の中でも最高である。子どもの手伝いは作業能力が未熟なため却って手間のかかることが多いが、やりたい気持ちを大切にする事が家事参加のきっかけになる事をよく心得ていると思われる。b.調理している側、d.栽培・収穫体験とも約50%であるがa.名前や味の説明は低いのは回答を2つまでに限ったためと思われる。

Q9 栄養面の質問では回答率が二分されa.成長発育のため、とb.ご飯とおかずのバランスが支持され、親の努力目標のc.自分で作れる料理をふやす、やd.情報に気を配る、が低い。

Q10嗜好面ではd.美味しく食べる、が最も高く、b.小さい偏食は楽観視が低い。結局b.は否定され、逆に考えると偏食させない事が大切となり、a.残さない、b.生活リズムよりも高くなる。

（3）学生の現状と子どもに望む事

項目を「現在のあなた自身」に改めて次の3問、「幼児の食生活で大切な事」に次の3問、計6問を課した。

Q7 食事習慣、Q8 家事、Q9 食意識
および

表 4 対象者別質問、学生用「学生の現状」および「大切と思う事」

(%)

学 生 の 現 状			大 切 と 思 う 事		
問い	回 答 内 容	回答率	問い	回 答 内 容	回答率
Q 7 食事習慣	a. 三食食べる習慣である	74.7	Q 10 食卓環境	a. 食事の時には保護者が必ず側に居る	61.2
	b. 夕食の夕食が定期的にある	28.2		b. TVなど見ないで家族がコミュニケーションしながら食べる	34.7
	c. 学校へ行く日でも朝食を抜く事がある	27.6		c. 箸の持ち方・姿勢などマナーを教える	30.6
	d. 弁当持参が多い	70.6		d. 食事の始めと終わりには挨拶、感謝の言葉を言う	55.9
	全体回答率	201.1		e. 食物は残さない	18.8
Q 8 家事	a. 食料品の買い物をよくする	40.6	Q 11 親子共有	全体回答率	201.2
	b. 親と共に台所仕事をよくする	27.1		a. 買い物や食事の場で名前や味などを説明	34.7
	c. 食事に関しては専ら食べる側	65.3		b. 調理している側で食物が出来上がって行く様子を見せる	50.0
	d. 出来合いのお惣菜を度々利用する	40.0		c. 子どもが手伝いたい時には出来る範囲で手伝わせる	92.9
	全体回答率	173.0		d. 子どもの希望を聞いて作る	32.4
Q 9 食意識	a. 家で食べる食事は美味しいと思う	88.8	Q 12 栄養面	全体回答率	210.0
	b. 美味しい食べ物店へはわざわざ出かける	32.4		a. 成長発育のために栄養的に整った食事にする	81.8
	c. 体調と栄養のバランスに気をを使う	33.5		b. 食事の時間を、生活のリズムに合わせる	64.7
	d. どんな時でも食事の後は満足感を感じる	52.9		c. 自分で作る料理の品数をふやす	36.5
	全体回答率	207.6		d. 栄養や食品の情報に気を配る	22.9
				全体回答率	205.9

Q10食卓環境、Q11親子共有、

Q12栄養面

表 4 にそれぞれの回答内容、回答率を示す。

「現在」のQ 7 食事習慣では70%以上が a. 三食食べる、d. 弁当持参と回答し、規則正しく食事をし、弁当持参の学生が予想以上に多く、好ましい現状である。しかし一方で a. 夕食の夕食、c. 朝食抜きも30%に近く、二極化していると思われる。

Q 8 家事では実行を示す a. 買い物は約40%、b. 親と共の台所仕事は30%弱である。家事を殆どしない c. 専ら食べる側が60%にのぼり、Q 7 での良好な結果も作る事は他人任せが多い事になる。

Q 9 食意識では a. 食事は美味しいと思っている学生は約90%近く、d. 食事後は満足も50%を越え食事の大切さを素直に認めている。その上で b. 食べ物屋へ、行く学生もいる。しかし c. 体調と栄養のバランスを気遣う学生が少なく、食事

と健康、栄養の関連がよく理解できていないのではと懸念される。

「大切」のQ10食事環境では a, 保護者が側、d. 挨拶・感謝の言葉の 2 つが50%以上の回答率を得、e. 残さないは20%に満たない。

Q11親子共有では c. 手伝いたい時が90%を越え最高である。次は50%に下がって b. 調理している側である。「現状」のQ 2 で、c. 専ら食べる側が高い事との矛盾を感じる。

Q12栄養面では a. 成長発育のため、が約80%で最も高く、b. 生活のリズムと続く。d. 栄養食品情報は低い。

問いの枠組みや表現のニュアンスが異なるものの三者間には類似の内容がある。幼児の食事時には親が側に居るは三者にまたがり約40%で差はなく、栽培体験の大切さは保護者より保育関係者が高い。

学生は保育関係者との類似が11件あり、内、手伝いたい時、成長発育のため、自作料理の品

数、生活リズムの4件が高い。低いのは2件である。

3. 子どもの頃の体験が現在に及ぼす影響

1. 共通質問、状況・経験の部では対象者全体の結果を述べ、対象者別の違いも少し加えた。2. 対象者別質問、現在の部では対象者別の質問内容とその結果を述べ、類似質問では対象者別の違いも少し加えた。

此处ではさらに1. と2. の関連・関係を探り、幼少・学童期に於いてどのような食育が望ましいかを導き出そうと思う。

(1) 共通質問による判定基準と人数割合

Q1からQ6までの共通質問回答は各対象者（パネル）によって異なるが、優良な経験、優良な状況と思われる対象者（パネル）とそうでない対象者（パネル）を区分するために次のような視点で判定する。

Q1周囲の状況ではa.関係者が農業、b.豊かな自然環境、c.栽培収穫体験の3つ全部の回答者を自然体験豊富・自然環境良好とみなし「優良判定者」（以下「優良」）、2つ以下の回答者を自然体験・自然環境とも可とみなし「可判定者」（以下「可」）と区分する。d.自営業店は判定基準から除外してある。

Q2台所の情景ではd.あまり行かないのみに基準を置き、無回答者は、台所や家族、食事など

様々な面で接触・コミュニケーションが取れているとみなして「優良」とし、同意した回答者は「可」とする。

Q3とQ4では共食のみに基準をおきQ3 a 一緒に食べるおよび、a.父と一緒にの事が多いの両方の回答者、即ち、家族が共に食事をしていたとの思いをもつ人を「優良」とし、両方とも無回答者を孤食傾向が見られるとして「可」とし、片方のみの回答は除外した。

Q5親子の共有では内容ではなく、回答の件数で判定し、4つ全部の回答者を「優良」、1つ以下の回答者を「可」とし、2つと3つの回答者は除外した。Q6行事・郷土食もQ5と同じように回答数で判定した。

その結果、Q1とQ2では対象者全員がどちらかに判定されるが、Q3以降は全員が集計対象にはならない。

表5には判定基準毎に「優良」と「可」の人数割合を示す。

Q1の判定を見ると「優良」は学生が多く過半数を占め、他の対象群との差が見られる。Q2では「可」は結果1の表1と同一で非常に小さく、ダイニングを良いイメージでとらえているパネルは総ての対象群で90%以上である。

Q3 a・4 aに関しては表1では、保育関係者が高くここでも他の対象群の2倍になる。表1ではあまり差のなかった保護者と学生では本表では差が大きくなり保護者の「優良」が高く対象群による差はあるが、「可」の差は小さい。

Q5の判定では、表1全体回答率と同様学生が最も「優良」が大きい。保護者と保育関係者では逆転し保護者の「優良」が大きく「可」で見ると保護者と保育関係者に差は無い。学生の「優良」と「可」の関係よりQ5は学生が良いイメージでとらえていると思われる。

表5 共通質問による判定の人数割合

(%)

対象群	保護者 n=92		保育関係者 n=45		学生 n=170	
	優良	可	優良	可	優良	可
Q1 周囲の状況	39	61	36	64	52	48
Q2 台所の情景	92	8	93	7	95	5
Q3・4 朝食・夕食の共食	36	15	67	13	24	16
Q5 親子の共有	15	39	9	38	29	21
Q6 行事・郷土食	54	4	60	11	46	12

Q6の判定では保育関係者が、保護者より「優良」が大きい「可」との関係も加味すると表1と同様に対象群による差は小さい。学生は表1と同じように「優良」は最小である。

全体として、「優良」は保育関係者が学生と保護者よりも大きい「可」は学生が最も小さいので、学生が子供の頃は食状況・食経験が良好であったと回答している。

(2) 判定基準別の回答率

表5に示した5つの判定基準によって分けた「優良」と、「可」の現在の部の回答率を調べた。

まず保護者の場合について、表2に示したQ7からQ10までの19の回答選択肢全部を「優良」と「可」に分けて再集計した。表6には判定基準「Q1周囲の状況」の回答率を示す。そして「優良」と「可」の回答率の比を次のように4段階に区分けした。即ち両者の比が1.2倍までを「差なし」、1.5倍以上を「差あり」とし、更に「差あり」の場合、「優良」が「可」より高い場合には「支持」、「優良」が「可」より低い場合には「不支持」、「差なし」と「差あり」の間

を「その他（実際には此处に2段階あり）」とし、区分けの欄に「支持」などと示す。

表6「支持」に該当した件数はQ7 d、e、Q9 b、d、eの5つ、以下「不支持」は3つ、「差なし」は5つ、「その他」は6つである。この事を表7 共通質問判定別・対象者別の区分け数のQ1・保護者の該当欄に5、3、5、6と示す。さらに対象者群による比較が出来易いように「支持」と「不支持」には19に対する割合も加えた。

このようにして、「Q2台所」から「Q6行食」までについても再集計し、表6のような判定別回答率を調べた。回答率の比を更に「支持」などに区分けして表7の保護者欄に順次示す。

同様に表3に示した保育関係者の16の回答内容、および表4に示した学生の25の回答内容についても再集計を行ない、表6の保護者「Q1周囲の状況」の手順を経て表7を完成した。

(3) 「支持・不支持」の件数と内容

表7はQ1からQ6までの共通質問回答結果を対象パネルごとに3. (1)で示した判定基準

表6 共通質問Q1の判定別回答率と区分け（保護者の場合）

(%)

対象者別 質 問	選 択 肢	判 定		区 分 け	対象者別 質 問	選 択 肢	判 定		区 分 け
		優 良	可				優 良	可	
Q7 困っている 事	a	52.8	64.3	そ の 他	Q9 実行する事	a	77.8	78.6	差 な し
	b	25.0	46.4	不 支 持		b	50.0	28.6	支 持
	c	16.7	30.4	不 支 持		c	69.4	55.4	そ の 他
	d	27.8	17.9	支 持		d	52.8	33.9	支 持
	e	8.3	5.4	支 持		e	83.3	50.0	支 持
	f	2.8	3.6	そ の 他					
Q8 自分の事	a	19.4	23.2	差 な し	Q10 大切にす る事	a	47.2	33.9	そ の 他
	b	36.1	41.1	差 な し		b	58.3	46.4	そ の 他
	c	33.3	51.8	不 支 持		c	86.1	62.5	そ の 他
	d	33.3	32.1	差 な し		d	86.1	85.7	差 な し

註

「支持」は良の判定者の回答率が可判定者の1.5倍以上

「不支持」は可の判定者の回答率が良判定者の1.5倍以上

「差なし」は両者の差が1.2倍以内

表7 共通質問判定別・対象者別質問の支持等件数

共通質問	Q 1 周囲の状況			Q 2 台所			Q 3・4 共食		
対 象 者	保 護 者	保育関係者	学 生	保 護 者	保育関係者	学 生	保 護 者	保育関係者	学 生
支 持	5 (26)	3 (19)	6 (24)	9 (47)	3 (19)	5 (20)	1 (5)	2 (13)	2 (8)
不 支 持	3 (16)	4 (25)	2 (8)	2 (11)	4 (25)	2 (8)	1 (5)	2 (13)	2 (8)
差 な し	5	6	13	4	4	5	10	7	11
そ の 他	6	3	4	4	5	13	7	5	10
計	19	16	25	19	16	25	19	16	25
共通質問	Q 5 親子共有			Q 6 行事			全体		
対 象 者	保 護 者	保育関係者	学 生	保 護 者	保育関係者	学 生	保 護 者	保育関係者	学 生
支 持	4 (21)	6 (38)	6 (24)	10 (53)	3 (19)	6 (24)	29 (31)	17 (21)	21 (17)
不 支 持	3 (16)	3 (19)	1 (4)	1 (5)	3 (19)	1 (4)	10 (11)	16 (20)	8 (6)
差 な し	6	1	6	3	4	8	28	22	43
そ の 他	6	6	12	5	6	10	28	25	49
計	19	16	25	19	16	25	95	80	125

()は%

によって「優良」と「可」に分け（その人数割合は表5）、さらに「優良」と「可」のそれぞれの回答率を再集計して（表6に保護者・Q1の例示）、「支持」、「不支持」などの件数を示した表である。

全体の欄を見ると保護者は「不支持」以外は同数、保育関係者は「支持」と「不支持」の件数はほぼ同数、そして「支持」と「不支持」の合計割合は保護者と保育関係者は同率である。学生の合計割合は最も低い。

「優良」の保育関係者が「不支持」件数が多いのは、保護者よりも子どもに対して一步引いた立場で見ることができ、学生よりも経験豊かなためと考えられる。

「支持」について見ていくとQ6・Q2の保護者、Q5の保育関係者、続いてQ1・Q5・Q6の学生の件数が大きかったが、「不支持」では保育関係者のみで大きい。

表8には表7で得られた「支持」内容を示す。

対象者群による「支持」の件数を判定基準別で見るとQ2台所の情景やQ5親子の共有が多い。非常に少ないのはQ3・4共食である。共食

の大切さは筆者自身も色々な面から認めてきたが本調査では、子どもの頃家族や父親と一緒に食事したと回答した「優良」の人たちは「可」の人たちと比べて「親としての現状」、「保育関係者として望む事」、「学生の現状」「大切に思う事」のいずれにおいても回答率に差はない。

「親の現状」の保護者質問ではQ9実行している事についての件数が最も多いが他のQ8自分の事・Q10大切にしている事・Q7困っている事についてもそれぞれ多い。具体的にはQ7e食欲が旺盛はQ1、Q2、Q6の3基準で、同じくQ9b上手に食卓に変化はQ1、Q2、Q5の3基準で支持されている。2つの基準で支持されたのはQ8のc調理技術が未熟、d栄養知識知りたい、Q9のd行楽は手作り弁当、e伝承料理、Q10a栽培体験である。

「保育関係者として望む事」の保育関係者質問ではQ7食卓環境・Q9栄養面が大きく、Q8親子共有・Q10嗜好面も大差はない。具体的にはQ9c自作料理の品数がQ3・4、Q5、Q6の3基準で支持され、2つの基準ではQ7c箸の持ち方、Q8のa名前や味の説明、d栽培体験であ

る。

「学生の現状」および「大切に思う事」の学生用質問では「現状」のQ 9 意識・Q 8 家事に集中している。「現状」のQ 9 c 体調と栄養がQ 1、Q 3・4、Q 5、Q 6 の4 基準で、Q 8 a 買物、Q 9 b 美味しい店も2 つの基準である。「大切」は1 つの基準の支持しかなく、「大切」の内容が十分に認識できていないためと思われる。

対象者別質問では記号・番号が異なっても同じ内容が2 (3) で述べたようにあるが、「栽培体験」のみが両対象群で支持されている。

表9 には「不支持」の内容を示す。

表8 と同様判別基準別で見るとQ 1 周囲の状況やQ 2 台所の情景で多い。表8 「支持」で最低のQ 3・4 はQ 6 行事食と支持数は同数でQ 1、Q 2 との差は小さい。

「親の現状」の保護者質問ではQ 1 周囲の状況、およびQ 5 親子の共有が多い。具体的にはQ 7 困っていることについては10件の内7 件を占め、困っている事は色々あっても大局的には大きな問題でないとしている。

「望む事」の保育関係者質問ではQ 9 栄養面が最も多くa 栄養の整った食事が3 つの基準で、d 食品の情報が2 つの基準で支持されていない。

(4) 「優良」が支持した事、しない事

表8 「支持」の対象者別内容

	保 護 者	保 育 関 係 者	学 生
Q 1 周囲の状況	Q 7 d 食事に時間 Q 7 e 食欲が旺盛 (○) Q 9 b 上手に食卓に変化 Q 9 d 行楽は手作り弁当 Q 9 e 伝承料理 (○)	Q 7 b TV 見ない Q 9 a 栄養の整った食事 Q 10 a 食物は残さない	Q 7 b 夕食の夕食 Q 8 a 買物 (○) Q 8 b 共に台所仕事 Q 9 b 美味しい店 Q 9 c 体調と栄養 (○) Q 10 b TV を見ない
Q 2 台所の情景	Q 7 c 骨のある魚 Q 7 e 食欲が旺盛 (○) Q 8 a 職業に就いている Q 8 c 調理技術が未熟 Q 8 d 栄養知識知りたい Q 9 b 上手に食卓に変化 Q 9 d 行楽は手作り弁当 (○) Q 10 a 栽培体験 (○) Q 10 d 子どもと一緒に	Q 7 a 保護者が側 Q 8 a 名前や味説明 Q 10 b 少しの偏食	Q 8 a 買物 (○) Q 8 d 惣菜を利用 Q 9 a 食事は美味 Q 12 a 栄養の整った食事 Q 12 d 食品の情報
Q 3、4	Q 7 a 偏食傾向	Q 7 c 箸の持ち方 Q 9 c 自作料理の品数 (○)	Q 8 c 専ら食べる側 Q 9 c 体調と栄養
Q 5 親子の共有	Q 9 b 上手に食卓に変化 Q 9 e 伝承料理 (○) Q 10 a 栽培体験 (○) Q 10 b 多くの人の手	Q 7 c 箸の持ち方 Q 7 d 挨拶、感謝の言葉 Q 8 a 名前や味説明 Q 8 d 栽培体験 Q 9 c 自作料理の品数 (○) Q 9 d 食品の情報	Q 8 a 買物 (○) Q 8 b 共に台所仕事 (○) Q 9 b 美味しい店 Q 9 c 体調と栄養 (○) Q 9 d 食後は満足 Q 11 d 希望を聞いて
Q 6 行事食	Q 7 e 食欲が旺盛 (○) Q 8 a 職業に就いている Q 8 b 手作り、ならない Q 8 c 調理技術が未熟 Q 8 d 栄養知識知りたい Q 9 b 上手に食卓に変化 Q 9 d 行楽は手作り弁当 (○) Q 9 e 伝承料理 (○) Q 10 a 栽培体験 (○) Q 10 c 健康な心身のため	Q 8 d 栽培体験 Q 9 c 自作料理の品数 (○) Q 10 c 生活リズム	Q 8 d 惣菜を利用 Q 9 b 美味しい店 Q 9 c 体調と栄養 (○) Q 10 b TV を見ない Q 10 e 残さない Q 11 a 名前や味説明

(○) は「支持」のみの該当内容

表8 と表9 を比べると支持と不支持両方である例がある。支持のみの内容は21、両方は18、不支持のみは3、となりやはり「優良」は多くの内容を支持している。3 つ以上の基準で支持のみの回答内容を見ると保護者では4 件、保育関係者で1 件、学生では3 件、反対に2 つ以上の基準で不支持のみは保護者と保育関係者で1 件ずつである。これらを表8 では該当内容の末尾に○を、表9 では△で示す。

保護者の「優良」は、食欲が旺盛で太り気味、行楽の時には手作り弁当を持参、冬至のかぼちゃ、土用のうなぎなど伝承料理を取り入れる、栽培体験などを通して食物には命がある事を伝える、の4 つに高い支持を示す。また、アレルギー体質なので心くばりが大変、の不支持

表9 「不支持」の対象者別内容

	保 護 者	保 育 関 係 者	学 生
Q 1 周囲の状況	Q 7 b おいだめ Q 7 c 骨のある魚 Q 8 c 調理技術が未熟	Q 8 a 名前や味説明 Q 9 a 栄養の整った食事 (△) Q 9 d 食品の情報 Q 10 d 雰囲気工夫	Q 7 c 朝食を抜く Q 10 a 保護者が側
Q 2 台所の情景	Q 7 d 小食 Q 7 f アレルギー体質 (△)	Q 7 c 箸の持ち方 Q 8 d 栽培体験 Q 10 a 食物は残さない Q 10 c 生活リズム	Q 9 b 美味しい店 Q 11 d 希望を聞いて
Q 3、 4	Q 8 d 栄養知識知りたい	Q 7 b TV見ない Q 9 a 栄養の整った食事 (△)	Q 9 a 食事は美味 Q 12 d 食品の情報
Q 5 親子の共有	Q 7 d 小食 Q 7 f アレルギー体質 (△) Q 8 b 手作り、ならない	Q 7 a 保護者が側 Q 8 c 手伝ってもらおう Q 10 b 少しの偏食	Q 10 d 挨拶、感謝の言葉
Q 6 行事食	Q 7 c 骨のある魚	Q 7 a 保護者が側 Q 9 a 栄養の整った食事 (△) Q 9 d 食品の情報	Q 12 d 食品の情報

(△)は「不支持」のみの該当内容

が高いのは、「優良」にはアレルギー体質の子どもが少ないと考えられる。

保育関係者では、自分で作れる料理の品数をふやす、が高く支持され、成長発育のために栄養の整った食事をする、が以外にも不支持が高い。

学生では食料品の買物をよくする、親と共に台所仕事をよくする、体調と栄養のバランスに気を使う、が高い支持を得「優良」の影響が現在によく反映していると思われる。

IV. おわりに

今回、家庭における食の場面として様々な状況を盛り込み、自分が育った環境などが現在の食生活に影響を与えているかを質問紙法によって調査を行なった。その結果、子どもの頃の優良な食状況・食経験は現在の食生活に良好な影響を及ぼす事が示唆でき、やはり子どもの頃からの食育は重要である。各基準による「優良」が同一パネルではないのでどの条件が大きな影響を与えるかに対しては明白な関連性は得られなかったが、それは出来ることから、気の付いたことからそれぞれの家庭・地域で行なえば良

いということにもなる。

食は非常に多様な面から成り立ち、また多様な面に影響を与える。将来に亘って平和な社会・環境が続くためにも「食育」を大切に実践して行かなければと思う。

最後に今回の調査にご協力いただいた関係機関、および御回答下さいました方々に感謝いたします。

参考文献

塩原紘栄：小学生の食生活調査

富山短大紀要37集 '02. 3

塩原紘栄：幼児の食生活と嗜好

富山短大紀要39集 '04. 3

小川宣子：幼児期における食教育

食生活研究 '03. Vol23.no6

(食生活研究会)

河野美穂：食を通じた子供の健全育成

小児科臨床 '04 57巻第12号

(日本小児医事出版社)